令和5年度　第1回　学校運営協議会

令和5年7月12日（水）
午前10時30分
3階　会議室

出席者　校長、 教頭、 運営協議会長、 木崎自治協力会会長、 木崎育生会会長、 学校薬剤師
聖フランソワ幼稚園長、 木崎中学校長、 PTA会長、 PTA副会長　PTA副会長
地域連携コーディネーター

進行　教頭

1　校長　あいさつ
2　委嘱状交付　→　机上配布
3　委員自己紹介
4　会長、副会長選出・決定
5　開会宣言（会長）
6　学校運営に関する基本的な方針等の説明と承認

校長　5つの重点目標について
（1）学力向上　授業におけるデジタル化　高学年の教科担任制
（2）安心安全　危機管理の徹底
（3）地域とともにある学校づくり
　ホームページの活用　学校だよりのデジタル化
（4）教員の資質向上　授業研究等の推進
（5）心の教育　いじめ案件への対応　早期対応
　性別によらない対応　男女別の取りやめ

懸案事項

・給食室プレハブ小屋の解体
・廊下タイル補修　PTA ボランティアの協力
・樹木の伐採、剪定

質疑応答

・樹木伐採については学校の歴史も尊重することが大切
・緑の大切さ、空洞化による危険、専門家の助言
・樹木医の診断、管理の方法を工夫
・計画的な剪定、教委との連携、防音、防塵
・緑に囲まれて学び育つ環境も大切にしたい
・予算面、優先度（危険度、枯れている）
　残せる木も視野に　バランス、防犯面も視野に検討していく

7　熟議　　目指す学校像　自ら学び心豊かでたくましい児童の育成

・心豊かに　情を育て、得を積む

・昨年度のまとめから

自律、自立した人になるためには　安全、安心な環境が必要

熟議という言葉にこだわらず、各自の意見、学校を大切にしたいという気持ちを出し合って進めていきたい。

自由闊達な論議から軌道修正をしてくれる人が出てくる

子どもがいるからこそ伝えたいこともある

学校の視点から

・課題の整理に追われることなく、失ってはいけないものを見つけ出すことが大切である
その中から大事にすべきことを発信していく、木崎の文化として

・コロナ禍の影響で話す、しゃべる事が少なくなっている

・将来の不安が多い、自己肯定感、夢や希望　を育てていきたい

・幼稚園でも歌わない、食事の時にしゃべらない生活を送ってきている

・誰もが頼れる場所、人をもってほしい。そのために先生と児童の信頼関係を培ってほしい。

・困ったときに正直に言える人が身近にいるようになってほしい。親もそれを子どもに働きかけてほしい

地域の視点から

・子どもの反応、あいさつ、コミュニケーションが薄くなってきている
地域、家庭、学校が一体となって人と人のつながりが薄くならないように取り組んでいきたい

・自治会の目標も　安心・安全である
みんなが住んでよかった街、あいさつのできる街
コミュニケーションができると災害でも共助が生きてくる
祭りなど子供が来ると親も来る
異年齢間の交流を充実する

・コロナ過のために子どもたちがのびのびと過ごすことができなかった
半面、ブレーキをかけることも必要

家庭の視点から

・家庭では生活習慣、あいさつ習慣を育てる、そのためには多様な体験、経験を増やしていく

・学校、家庭、地域のそれぞれが完璧を求めると苦しくなるので、互いに足らないところを補えるのは何かを考えてみんなで木崎小を創っていきたい

・子どもの反応が薄い（人間関係も含めて）これをどう育てるか
理想の教師像を実現できないと批判の対象になってしまうが、居心地の良い学校、クラスを創っていきたい

・明るく、仲よく進んでやっていきたい
木崎小、木崎エリアを少しでもよくしていこうということに尽力していきたい

8　事務連絡

9　閉会宣言　　居心地の良い協議会を目指していきましょう

終了12時00分

令和5年度　第2回　学校運営協議会

令和5年12月12日（火）
午前11時00分～12時45分
3階　会議室

出席者　校長　教頭　教頭　教務主任　運営協議会長　木崎自治協力会会長　木崎育成会会長
学校薬剤師　木崎中学校校長　PTA会長　PTA副会長　PTA副会長
地域連携コーディネーター

第1部

1　校長　あいさつ
2　学校評価について
【児童評価について】
〇10項目の質問項目のうち肯定的回答が90％を超えている項目が多い。児童たちは充実した学校生活を送っていると考えられる。
〇「いやなこと困ったことがあれば誰かに相談できる」については「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答している児童が23％。家庭と協力しながら児童たちを見守っていくことが大切である。
【保護者評価について】
〇ICT、あいさつ、ルール、マナーの項目については肯定的回答が80％を下回る。ICT の活用については今後も研究していきたい。また、あいさつについては毎年大きな課題と捉えている。行事の復活や日々の見守りについては肯定的回答が得られた。
【教職員の評価について】
〇肯定的な回答が多いが、ICT は模索状態である。あいさつの充実に取り組んでいきたい。

≪質問、意見≫
〇児童アンケートにおいて否定的回答が23％の項目について、「誰にも相談できない児童」が4人に1人ということになるがどのように対応するのか。
〇3年生以上は心と生活アンケートを行い、要面談と判断した場合は個別に話を聞いている。さらに日頃より担任が注意深く観察、面談をしている。また、月1回の教育相談日ではスクールカウンセラーやさわやか相談員の対応も適宜実施している。
〇アンケートの質問の仕方はどのように行っていたのか。→児童各自のパソコンで回答
〇1，2年生は質問の意図を児童が正しく捉えていないことも考えられる。孤立している児童が23％いるかというと、そうとは限らないと思う。また、23％が父母にも相談できないとは必ずしも限らないとも思う。本当に23％孤立していたら重大問題だが、実態は少し違うような気がする。学校は児童たちの自立を育てる目的があるが、「困ったときは頼ってよい。」という雰囲気を醸成していくことが大切だと思う。親も教師も児童たちに、一人で何でもできるようになってほしいと願っているが、そのためには頼れる雰囲気作りが必要となる。
〇相談したいがどういうタイミングで誰に相談したらいいかが分からないこともある。高学年になると周囲の目を気にして相談しづらいのではないか。相談しやすい方法と環境を考えていきたい。
〇「命の支え合い」という授業がある。また、中学校のさわやか相談員の活用も行っている。「周囲にいる人、誰にでも相談していいよ」という指導をしていきたい。また、相談できない評価をした理由として「困っていないから」ということもあるので質問文も精査していく必要がある。
〇児童たちの相談窓口を広げていくことは引き続き行っていく。友達に頼られ自立できる子を目指していく。
〇保護者が「満足していない」という意見について。アンケートの方針自体がマイナス意見の方に誘導しない設計になっているのかもしれない。各自の意見（自由記述）は学校に対して辛辣なものも多いのも事実である。

〇以前は紙媒体だったので提出していたが、今はデジタルなので PC を開いてやることでスルーしてしまいやすい部分もある。学校だよりを見ても行事予定は見るが校長の文章は見ないことも多い。
〇スマートフォンでも見られるので見やすいが、デジタルで見たものは印象が薄い。
〇SDGs'、文書の管理、働き方改革、ICT の普及などの要因によりお手紙のネット配信が全市で増えている。
〇中学校も6月からお手紙についてホームページ配信にしている。県では昨年度からペーパーレス、市では今年から実施している。ネット配信は便利だという人もいれば自分からアクセスしなければいけないので不便だという人もいて、賛否両論ある。学校の情報発信をホームページ化した段階で、保護者の評価も下がった部分もある。世情を見ても変化している。実際に電車で新聞を見ている人はほとんどいない。
〇民間の会社ではパソコンを持ち歩き、紙とペンでメモも取らない時代になっている。
〇「あいさつ」「ありがとう」が大切になってくる。会社でパソコンは見るが、顔を見てあいさつをしないこともある。先生方があいさつをしているかが大切だと思う。木崎自治会も「あいさつができるまち　木崎」を標榜しているが、防犯の面から知らない人から声をかけられたら・・・ということもあり難しい。
〇教職員のあいさつについての意識を高めていきたい。一方で私は学校前を通る人には声をかけている。
〇あいさつは関係性を意識する中で生まれてくると思う。関係性がないところであいさつは生まれないのではないか。
〇実際、防犯パトロールをしている時はあいさつをするが個人ではしないこともある。
〇アンケートで「あいさつ」について問うことについては限界がある。
〇例えば高学年女子（思春期）になると、あいさつがいえない実態がある。そこで無理やり言わせるのがよいかという論議もあるが、その子供のできる形であいさつができれば「よし」と考えている。
〇何事もあきらめずに続けていくことが大切である。

3　いじめ防止対策について
〇いじめ防止対策については学校ホームページで公開しているが、早期発見対応に努めている。教育委員会には積極的に報告している。継続的な案件はない。本年度は6件の報告がある。押されてケガ、無視などがある。事実確認をして、保護者と連携を行っている。いじめが継続している事実はないが、日常的に見落としがないように見守っている。
〇早期発見に努め、いじめとなる行為が適切でないことを指導している。また、いじめについては本人がいじめと感じている点を優先している。昔の感覚とは異なっている。
〇中学では悪口、部活動内の人間関係の悩みが多い。
〇教員の指導が行き届いていることを感じる。昔は学校があるのに街中でたむろしている生徒も見受けられたが、今はむしろメンタルが弱い方が心配である。
〇中学生がよくあいさつをしてくれる。素直でいい子が多い。
〇小学校の指導の成果が生きている。
〇目に見えない、陰で陰湿ないじめがあれば何とかしなければいけないと思う。
〇SNS では証拠が残るので数は少なくなっている。見えにくいといわれているが逆に画面に残る。むしろ言った言わないという事の方が多い。
〇事実関係の部分で小学生は語彙力や記憶力の面で、これはいじめかふざけ合いか微妙な面があるが、見逃さないように注意していきたい。

第2部

4　開会宣言
5　熟議「自ら考え行動できる自律・自立した子どもを育てるために」具体的にできることを決めよう
〇今日は十二日まちが行われているが、今は児童の頃の地域での体験が残りづらい時代かもしれない。

〇児童の頃の体験が今はよい思い出となっている
〇この地域、学校に学校運営協議会としてどんな提言をしたらよいか、児童たちを育てるために、学校評価を踏まえてご意見を伺いたい。
〇「木崎っ子ランド」の復活は高学年の自立を促すよい取り組みで、続けてほしい。
〇学校行事で、高学年が手伝いをすることは貴重な体験だと思う。自分の成長への気付きや意識を高められる。
〇いじめについては誰かに相談したら見つかるかも知れないという不安もある。他の子がいじめられていることの目撃なども相談できる話しやすい環境を作ってほしい。
〇いじめのスタートの定義は難しいものもあるが、本当に困ったら自分の悩みを隠さず訴えることができる空気をつくっていくことが大切だと思う。組織づくりも大切だが。
〇児童同士で注意し合える仲間作りができればいいが。相談する前に「そんなことをやめようぜ」と言える様に。
〇「そんなことをやめようぜ」と言った子が次にいじめられる不安もある。今の子は弱いので、親にも悩みを言える雰囲気がとても大切だと思う。親が心配してくれたり、助言してくれたりすることが大切で、親のできる一番大事なことかと思う。親の存在は大きい。
〇いじめの6件は、保護者の方々から上がってきた。学校は児童のトラブルについて様々な申し出を受ける。いじめでなかったとしても、児童が親に言えることが大切と考えている。
〇担任に期待したい。面談などでは児童の様子や学校の様子を教えてほしい。
〇教員のスキルなのだが、情報を出すとトラブルをひきおこすこともあり難しい時代になっている。
〇何とかして若い教員を育てる必要がある。
〇皆びくびく、おどおどしながら自分が傷つかないように仕事をしている。昔の指導が今は通用しないので大変だと思う。学校は理想を求めていく場所でありたい。その信念を教員、保護者、地域が持ってプライドを持って仕事をしてほしい。理想を皆で共有して取り組めたらよいと思う。そこで、来年度に向けて木崎小を「ありがとう」のあふれるクラス　学校　地域にしていきたいと思う。どうやって「ありがとう」のあふれる学校づくりを進めるか、木崎小の理想としたい。話しやすいことが人と人とのつながりの濃さ、安心感を生み学力向上につながっていく。このようなまとめで次に進めていきたいので、これからも遠慮のないご意見をいただきたい。
〇「ありがとう」が広まるためには、相手を知ること、相手に関心をもつことが大切だと思う。

6　事務連絡

7　閉会宣言
素晴らしい意見をいただき「ありがとうございました」この精神で学校、地域を盛り立てていきたい。今後もよろしくお願いします。

令和５年度　　第３回　学校運営協議会

令和６年２月１３日（火）
午前１１時００分～
３階　会議室

出席者　校長　教頭　教頭　教務主任　委員長　フランソワ幼稚園長　学校薬剤師
木崎中校長　ＰＴＡ会長　ＰＴＡ副会長　ＰＴＡ副会長　地域連携コーディネーター

第１部

１　あいさつ

２　学校評価について

〇学力向上について

スクリーンの設置によりタブレットの活用が図られている。
ドリルパーク、スタディサプリの活用を図っている。
校内研修は全教職員の授業公開を行っている
教科担任制を導入し効果を上げている。

〇安全について

けがが減少してきている。
不審者侵入対応の研修を行っている

〇地域とともにある学校づくりについて

地域学習の推進を図っている。
ホームページで情報発信を進めている。

〇教員の資質向上について

児童理解についての会議を行い、情報の共有を図っている。

〇心の教育について

いじめや懸案事項についてはすぐに対応し、継続した指導を行っている。
子どもと教師の面談を継続して行っている。
問題が生じたときは、管理職と担任等ですぐにケース会議を開き、心配なことは朝の段階で方針決定し、下校時までに保護者に連絡を入れ、迅速な対応を行っている。
あいさつについて児童の意識と実態に差がある。

◎次年度への課題

宿題を減らして家庭学習を奨励してきたが、家庭学習のガイドラインを設けていきたい。
地域の教育力の活用をさらに進めていきたい。
スクールダッシュボードの活用については、取組を進めていく。

≪自由討議≫

・落ち着きのない子への対応について、授業との両立についてどのように対応しているか。
・昔は一人の教員で対応して大変だったが、その結果、意識の共有が図られ教員間の連携、風通しのよさ、まとまりにつながっていた。今の方が多様な不安要素が多いが（けがや保護者からの要望、意見など）ネガティブからポジティブに変える教師の力量を期待したい。
子ども一人ひとりを育てるにはクラスの大勢の子どもたちとの関係が大切になる。
横の関係、友達同士が信頼関係を築き、互いに面倒を見るようになってほしい。
集団としてどうやって作っていくかが課題となるが、教員がみんなで見ることで児童理解の共有化が図られ、いつもみんなが声をかけることで子どもの変容につながる。
教師集団の芯の部分ともいえる学校の持っている力を強化していきたい。
・子ども一人ひとりをどう生かして伸ばすか、手のかかる子ではなくどう手を差し伸べたらよいかに主眼を置いて指導を進めていきたい。
・児童理解研修やケース会議などが該当している。
・来年度、大東小学校に通級指導教室ができるがどう連携を図るか。
そらルームについてはどのように対応していくのか。
・本校から道祖土小学校に３名行っているが大東小学校に移れるか打診中である。
そらルーム（学校に来ているが教室に入れない子どもへの対応）は校長室を活用している。
２名の児童が来室していて、校長、教頭が子どもとの対話を進めながら指導している。
・学校までは来ることができるが教室に入れないという子はいない。本校では教室が足りなくて校長室を活用している。
・中学校はスクールカウンセラーの部屋とさわやか相談室の２部屋を使っているが、学習室に一元化したい。
（通級指導教室について）

・担当教員の指導力が大切と思うが、児童が教室を卒業した後の見届けについてはどのようにしているのか。
・次年度継続して通うかはその都度検討し、保護者と協議している。また、１年間通った子がその後の学校生活の中で活躍するなど成長した例を見たことがある。
・中学でも引き続き指導教室に通う子どももいる。
・今のシステムは週１～２回だが、特別支援学級の様子を在籍校の教員が見に行って、情報交換を行うことが大切だと思う。「預ければ何とかしてくれる」というようにはしたくない。
過去には担任が見に来るケースは皆無だった。
・個別の指導、支援計画を指導教室と在籍校との間で共有している。
・通級教室の担任や保護者と交換ノートを交わしたり、在籍校の担任が児童の様子を見に行くなどしたりして連携を図っている。

来年度の学校運営に関する基本的な方針の仮承認については全会一致で承認

第２部　熟議

開会宣言

・自己評価システムについて、保護者にはどう伝えているか
・ホームページを活用している。
・学校運営協議会では、たくさんある中から子どもたちを育てる根っこを見付けていきたい。
根っこを育てるために学校、家庭、地域でどうやって行ったらよいかを相談していきたい。
保護者の皆さんや幼児教育に携わっている先生、健康安全の面や中学校の視点からもお話をいただければありがたい。
・親ができることとして、たくさんの経験をさせることはできると思う。
・学校の先生が子どもに向き合ってくれていることを感じる　温かく応援してくれていて、その様子を他の子どもたちも見ている。
・先生方がこういう対応をしてくれたから、このようによくなったという保護者の話は貴重なエネルギーである。これを教員のエネルギー源としたい。
・子どもは中学校に向けてだんだん話をしなくなる傾向にある。子どもは自分をほめてもらいたい、よく見せたいので話半分に聞くようにしている。家庭内では伝言ボードを活用している。
その結果、家でも会話が増え、家族間のコミュニケーションづくりにも役立っている。
・学校だよりには、「子どもはうそをつく」と書いたこともある。
・かっこよく見せるうそと失敗を隠すうそがある。
・育てている方の声、話は良いものがある。子どもが成長していることを感じるときは、何かができるようになった時であり、年下の子の世話をするなど子どもなりに責任感をもてるようになった時である。心配な子には、保護者に対して入園前から専門機関と相談するようつながりをもてるよう助言している
・下の子が入ってくるとしっかりしてくる。問題を抱ている子は人間関係の上中下のバランスが悪いという話を聞いたことがある。「ありがとう」という感覚がエネルギーとなり心に残り子どもの成長につながる。上中下の関係がある学校という場で、子どもたちの人間関係が自然に育っていけたらよいと思う。小さいころに身に付けたものは、その時はわからなくても大人になっても残る。大きくなった時に意味がやがて分かる時がある。組織だからできる指導でもある。
・「ありがとう」にはおかげさまでという関係がある。ネガティブな事がおかげさまでの気持ちでポジティブに変わっていくことがある。あの事があったおかげで、これからはこうしようというように前向きになる。いろいろな子がいるが絶対に見捨てない、ほめるということも子どもと親に影響を与えている。
・どんな時でも助けてあげる（判断してあげる）、いつでも味方になり、話を全部を聞いてあげる、その中で本人が考えていくという姿勢が大切だと思う。
子どものけがは月曜日と金曜日に多い。金曜日は一週間の疲れの影響があり、月曜日は土日に遊んだ疲れの影響がある。土日の過ごし方を考慮できるとよい。
・自立という視点から子ども主体の授業を行う中で自立をはぐくんでいきたい。子ども同士の対話、話し合いを進める中で、小中の連携を進める中で子どもたちがやり遂げる体験を積み重ねたい。また、部活の中でも自分たちに考えさせる習慣を身に付けさせたい。
・主体的で対話的な授業ができるためには、子どもたちの中に環境（関係）が整っていないとできない。子どもたち同士がどういう関わりをしているかを見ていく必要がある。
・子ども（人間）を丸ごと育てたい（学習だけでなく）。失敗してもまた元に戻れるようにそういう気持ちを育てていきたい。学校だよりからもそのことを感じることができる。
・未来に生きる子どもを育てていきたいと考えている。
・いろいろなものを咀嚼して、子どもたちに最後に残るのは何かを見付けていきたい
「ありがとうのあふれる」をキャッチフレーズとして

閉会の言葉

・「ありがとう」「おかげさまで」「見捨てることなく」をこれからも大切にしていきたい。